

庄原市行政評価シート

令和 元 年度評価

事務事業名	国際友好都市交流事業(綿陽市との交流事業)					
実施期間	平成 17 年度 ~ 平成 年度	(終期の設定のない場合は、終期を空白)				所管課 企画振興部企画課

予算科目	会計 01 一般会計	款 02 総務費	項 01 総務管理費
	目 11 国際交流費	事業 0401 国際友好都市交流事業	

対象者	市民	対象者数など	訪問団員数最大50人程度
根拠法令・計画等	日本国広島県庄原市と中華人民共和国四川省綿陽市との経済技術友好協力に関する協定書		
HPアドレス	http://www.city.shobara.hiroshima.jp/main/government/kokusaikoryu/cat01/		

実施目的	庄原市と綿陽市、両市民の相互理解と友好を増進し、経済、技術等の協力関係を発展させ経済及び農業・工業等に関する科学技術、教育・文化などの広範な分野にわたり、多様な形態で交流と協力をを行い、両市の繁栄と両国民の友好協力関係の発展を促進する。
事務事業の概要	<p>隔年で相互訪問することとなっており、友好訪問団の派遣、受け入れの事務を行っている。合併以降の友好訪問団等の相互訪問の経過は以下のとおり。なお、平成30年度では日中親善協会を中心に民間団体で組織する協議会で民間交流のあり方を模索する取り組みを支援した。</p> <p>■庄原市からの訪問</p> <p>2005年(平成17年)9月 友好訪問 市長・市民(15) 22人 2007年(平成19年)8月 消防代表団訪問 団長以下 10人 2007年(平成19年)11月 友好訪問 市長以下 6人 2008年(平成20年)8月 四川大地震義援金贈呈 副市長・財政課長 2人 2010年(平成22年)9月 友好訪問(友好20周年) 市長以下 5人 2010年(平成22年)9月 友好訪問 市民(49)・随行 52人 2013年(平成25年)10月 友好訪問 市長以下 6人 2017年(平成29年)10月 友好訪問 市長以下 5人 2019年(平成31年)3月 庄原綿陽友好推進協議会訪問 日中親善協会長以下 5人</p> <p>■綿陽市からの訪問</p> <p>2006年(平成18年)8月 消防代表団 陳 友学団長以下 12人 2007年(平成19年)5月 友好訪問 張 世虎主席以下 6人 2009年(平成21年)8月 友好訪問 孫 波副市長以下 6人 2010年(平成22年)10月 友好訪問 陳 興春副市長以下 6人 2010年(平成22年)10月 文化芸術団(芸術公演) 吳 波団長以下 16人 2012年(平成24年)6月 友好訪問 林 書成市長以下 10人 2016年(平成28年)8月 友好訪問 張 錦明主席以下 5人 2018年(平成30年)11月 友好訪問 顏 超常務副市長以下 6人</p>

年度別実績概要	
平成 28 年度	綿陽市友好訪問団招聘 (5人)
平成 29 年度	庄原市友好訪問団派遣 (5人)
平成 30 年度	綿陽市友好訪問団招聘 (6人) 庄原綿陽友好推進協議会綿陽市訪問 (5人)

実績指標 (単位:千円)							
事業費 (インプット)	項目	内 容	H 28	H 29	H 30	合計	
	事業費	翻訳筆耕料・通信費	75	74	74	223	
		友好訪問団招聘及び派遣経費	916	1,483	1,288	3,687	
		庄原綿陽友好推進協議会補助			553	553	
		事業費計	991	1,557	1,915	4,463	
	財源	国県補助金				0	
実績 (アウトプット)	地方債					0	
成 果 (アウトカム)	その他	国際交流事業参加負担金	54	0	108	162	
	一般財源		937	1,557	1,807	4,301	

備 考	指標名称		基準値	H 28	H 29	H 30	合計				
	1	友好訪問団等の相互訪問回数									
		回									
実 績 (アウトプット)	2		1	1	1	2	4				
	2						0				
成 果 (アウトカム)	1	友好訪問団の相互訪問による交流人数	人	40	25	28	93				
	2						0				
備 考	H28交流人数:訪問団5人、歓送迎会出席者延20人(庄原市側)、歓迎会アトラクション出演(茶道)10人、市内視察5人 H29交流人数:訪問団5人・表敬訪問、歓迎会20人 H30交流人数:訪問団6人・表敬訪問、歓迎会11人・アトラクション出演等[日本舞踊]3人・市内視察3人・友好推進協議会綿陽市訪問5人										

事務事業名	国際友好都市交流事業(綿陽市との交流事業)	所管課	企画振興部企画課
-------	-----------------------	-----	----------

評価項目	所管課評価	市民意見	評価委員会	評価分布	
分布は、A:+1,B:0,C:-1で総回答数で割り、小数点以下四捨五入。ただし、A-C又はC-AがBより多い場合はA',C'に補正する				市民意見	評価委員会
優先度	C	B	B	分布 平均	分布 平均
A 同じ分野の他の事業と比較し、優先度が高い事業である。		0		0	
B 同じ分野の他の事業と比較し、優先度は中くらいの事業である。		3		4	
C 同じ分野の他の事業と比較し、優先度が低い事業である。		3	-1	3	0
認知度	B	A	B	分布 平均	分布 平均
A 対象者以外にも、おおむねの内容は知られている事業である。		4		1	
B 対象者には、おおむねの内容は知られている事業である。		1		5	
C 一部の者を除き、事業があることすら知られていない。		1	1	1	0
有効性	B	C	B	分布 平均	分布 平均
A 費用に対して、効果・成果が高い事業である。		0		0	
B 費用に対して、効果・成果が中くらいの事業である。		1		4	
C 費用に対して、効果・成果が低い事業である。		5	-1	3	0
受益者満足度	B	B	B	分布 平均	分布 平均
A 受益者(対象者)は、満足している事業内容である。		0		0	
B どちらともいえない。		1		5	
C 受益者(対象者)が、満足できない事業内容である。(改善要望がある ほか。)		0	0	1	0
市民(納税者)納得度	B	B	B	分布 平均	分布 平均
A 目的・費用・自己負担・内容等から、対象者以外も納得できる事業である。		0		0	
B どちらともいえない。		3		7	
C 目的・費用・自己負担・内容等から、対象者以外は納得できない事業である。		2	0	0	0
代替性	B	C	B	分布 平均	分布 平均
A 収益性や技術面から民間での実施が難しく、市が実施すべき事業である。		1		1	
B 民間での実施も可能であるが、公共性・公平性などから市が関与すべき事業である。		1		6	
C 市の関与は委託や助成とし、民間等での実施を検討すべき又は市が関与する必要はない事業である。		4	-1	0	0
まちづくり基本条例適合性	B	C	C	分布 平均	分布 平均
A 市民(団体等を含む。)の自立を促進する事業である。		0		0	
B 市民の自立促進までは期待できないが、条例の趣旨(市民が主役のまちづくり)に沿った事業である。		1		3	
C 条例の趣旨に沿った実施形態となるよう、手法・内容を見直すべき(終了を含む。)事業である。		5	-1	4	-1
所管課評価	事業のあり方を検討				
評価視点	平成2年の経済技術友好協力に関する協定書締結以来、約30年にわたり交流を続けており、庄原市から綿陽市を訪問した人数は330人、綿陽市から庄原市を訪問した人数は275人となっている。しかし、交流人数だけではなく、中国の経済発展による社会情勢の変化や市民ニーズ等に対応した事業のあり方となっているのか評価する必要がある。				
所管課が課題と 考える内容	約30年にわたり交流を続けているが、行政間の交流が主体となっており、交流の広がりを図る必要がある。また、交流の担い手を官から民へ移行させることも検討する必要がある。				

市民意見(プラモニ)		※市民意見は、意見数集計のみを評価とします。(プラモニとしての総括評価はありません。) ※全意見は、ホームページに掲載しています。				
意見数分布	現行どおり	拡充	縮小	終了	その他の見直し	総回答数
	1	0	0	2	3	
主な意見	【現行どおり】	<ul style="list-style-type: none"> ・国際交流は大切である。行政だけでなく、企業・産業・観光等の交流に繋げていくことで、更に交流が広がると思う。 アウトカムについて、交流人数となってているが、この事業による波及効果を別のもので示せないか? 				
	【終了】	<ul style="list-style-type: none"> ・庄原市民及び市に対して何のメリットがあるのでしょうか? 以前から友好都市提携をしているから、昔からのしきたりで表敬訪問いう名の異議の無い海外観光旅行化していませんか? 人口数万人の庄原市が人口500万人近い大都市と姉妹提携する意義が理解できません。 庄原市と同じように山間部の少人口の自治体でなつかつ観光や産業面で学べることがある自治体と姉妹提携すべきではないでしょうか。 ・事業を継続するのなら、例えば個人観光者・旅行者、訪問人数5人以上(5人がいいのか50人がいいのかは別として)などの何か小さな目標を決めて達成していく方法・手段に予算を使われたい。趣旨・目的が今の目的では大きすぎて逆に予算も時間も不足。趣旨目的は今のままでもよいが。 実績と成果が、訪問回数・訪問人数だけでは何の効果もないとしか言わざるを得ないのでは。 				
	【その他の見直し】	<ul style="list-style-type: none"> ・30年も続けてきた事が何よりの財産です。時には政治の影響を受けながら、それでも絶える事なくその国を訪問した一般的の市民の方々、市の方針は良かったと思います。 30年も続けた実績と人脈を生かすべく時代の変化と需要に合わせた交流を続けるべきだと考えます。 庄原市には幾つものスキー場があり、訪問団を10名以下の制限とせず、100人単位でスキービュー体験や市内の小中学校の青少年交流を積極的に進めてはどうでしょうか。 青少年同士の政治抜きの純粋な友情を促進することを目的とし、訪問者が全て自費で、行政は情報提供サービス(ビザ申請手続き含む)や滞在中のサービス充実に精を尽くし、双方にメリットがある持続可能な国際交流を目指してはどうか。 青少年の交流は、長期的に考えれば、庄原市が少年時代の楽しい思い出の場所となり、すれば国際交流さらに世界平和にも繋がると考えます。 ・庄原市と綿陽市が何を得て何を与えていたのかがよく分からぬと思います。交流自体はSNS全盛期の時代にはオンラインでも可能ではないでしょうか。 				

行政評価委員会評価 その他の見直し

※行政評価委員会の摘録(会議内容)は、ホームページに掲載しています。

総括意見

来年度には30周年を迎える、長年にわたる交流事業の蓄積の中で育まれてきた友好関係は大変意義深く、事業は継続すべきと考えるが、内容については、所管課認識にあるように見直す必要がある。

今後は、従来の行政間交流よりも市民間交流の支援を主とし、特に両市の次世代を担う人材育成に繋げるための青少年交流事業の拡充を望む。

また、実施した事業については、草の根交流の発展、及びこの事業本来の目的に沿ったものとなるよう、まずは、より多くの市民へ情報還元する手法について検討されたい。

※委員会における最終的な評価として総括したものであり、最も分布の多い評価を優先するものではありません。

評価分布	現行どおり	拡充	縮小	終了	その他の見直し
	1		1		5

【現行どおり】 ④翌年には30周年を迎える歴史のある取り組みだと感じる。国際化や多様性が求められる近年であるがゆえ、青少年交流に重点をおき、庄原市の将来を担う人材育成に繋げるのが良いと考える。

【縮小】 ①平成2年から始まった事業ですが、当時は経済的にも技術的にも庄原市が優位に立っており協力関係は良好だったと聞いています。市長訪問時には大変な歓迎を受けたようですが、現在の人口、面積、科学技術、農業部門などからみると協定書に沿った事業を実施するにはかなり無理があるように思います。しかしながら30年の歴史を刻んできたことには意義深いものがあり、この30年を記念する式典を契機に新たな交流を双方で検討する時期に入っていると思います。

【その他の見直し】 ②旧庄原市により協定書締結以来30年余りの交流はあるものの両市の経済規模や人口など大きな差異があることから、当初の目的にあった経済や農業・技術等の協力関係の発展については、これまで難しく交流等に至っていない面がある。しかしながら、教育・文化の交流については小学生等の交流など、ある程度の進展があったように思える。そうした中で、今後は両市の将来を見据た交流を目的として主に青少年を中心とした交流に切替え内容を見直しすることが必要と思える。

③中国の発展(綿陽市も同)は目を見張るものがあり、同じアジアの友好国として約30年間積み重ねてきた交流事業は庄原市にとって他市にない価値観があると思う。この価値観をもっと幅広く市民と共有し役立てるべきだと思う。来年の30周年記念事業ではもっと一般参加型の内容を検討する必要があると思う。

⑤国際交流として、市民の方あるいは、次世代を担う青少年が早い時期に異文化に触れる機会があることは、貴重な体験ができ極めて有益なことだと思います。

より多くの青少年が体験できる事が理想だと思いますが、それが難しい様であれば、派遣された代表が、具体的な体験を水平展開することにより、この事業がより有益な事業として発展出来ると思います。そのために事業の内容の見直しが必要だと思います。

⑥昨今の世界情勢に鑑みても、近隣諸国との友好的な地方レベル・民間レベルでの交流は、ますます必要になっています。従って、事業の継続自体には賛成です。しかし、いまの事業の在り方が、本当に有効な交流になっているかという点については、大いに疑問があります。綿陽市との姉妹都市交流については聞いたことがあっても、実際に何が行われているかは分からぬ…というのが、大半の市民の感想ではないでしょうか。一部の人たちの、「視察という名の海外旅行」になってしまってはならないと思います。また、「10周年記念式典」「20周年記念式典」「災害時の義援金」も、交流の「目的」ではないはずです。市民ひとりひとりが、綿陽市あるいは中国を、友好都市(友好国)として身近に感じられるようにならなければ、姉妹都市交流の意味はないと思います。農業交流をして学んだこと。青少年交流を通じて、子どもたちが感じたこと。どんな技術・文化の移転が相互に行われているのか。交流を、市政にどう生かしていくかを考えているのか。そういう具体的な内容を、具体的に示せるような交流をしていただきたいと思います。また、それを市民に伝える手段を講じてもらいたいです。

⑦当初の目的に沿った事業となるよう、内容を充実させてほしい。市内の小中学生の綿陽市訪問は2年に1回と確認書に記載されているにも関わらず、近年の訪問は4~5年間隔。災害で実現不可能な年度もあったろうが、日本とは違う経済・技術・教育・文化について子供たちに触れてもらう良い機会である。今後の青少年交流事業に期待する。

今後の事業実施の方向性 その他の見直し

詳細	令和2年度は綿陽市との友好提携30周年となる。そこで、改めてこれまでの交流経過を市民と情報共有するとともに、市民参加を基本とした記念行事等を実施し、交流のすそ野を広げる起點とする。 具体的には広報しょうばらへの記事掲載や交流のあゆみ写真展などを開催する。
備考	当初予算額 令和2年度： 13,423千円 令和元年度： 2,728千円